

日本ガラス工芸学会 2016 年度大会

プログラム

日時：2016 年 10 月 15 日（土） 10:00～18:00

会場：多摩美術大学

A 発表（口頭）：レクチャーホール 301

A 発表（ポスター）B 発表，C 発表：工芸棟ガラス講義室

10:00～10:05 開会の挨拶（於：レクチャーホール 301）

10:05～12:45 口頭発表（A 発表）途中休憩 10 分

12:45～13:45 昼休み

13:45～15:45 ポスター発表（A, B 発表）

C 発表（液晶ディスプレイによる作品紹介）

（於：工芸棟ガラス講義室）

15:45～16:00 工房見学

16:00～16:30 吹きガラス実演

16:45～閉会・記念写真撮影（於：工芸ギャラリー）

閉会後 図書館（伊東豊雄氏設計）見学

18:00～懇親会

【会場について】

- ・ 午前と午後で会場が異なります（午前の会場から午後の会場までは徒歩 3～5 分ほど）。
- ・ 大会受付は、午前は口頭発表会場前（レクチャーホール 301）、午後はポスター・C 発表会場前（工芸棟ガラス講義室）に変わりますのでご注意ください。
- ・ 15:45 から工房見学があります。ふるってご参加ください。
- ・ 16:45 に記念写真撮影と閉会の挨拶を行いますのでご参集ください。その後、伊東豊雄氏設計の図書館の見学会を行います。
- ・ 懇親会は 18:00 より橋本駅近くで行いますので、各自バスで向かって下さい。詳細は当日、受付にてご案内いたします。
- ・ ※午前の受付は 9:30 から、午後は 12:45 からになります

口頭発表（A 発表 6 件） 10:05～12:45

(司会：井上 暁子)

10:05～10:30 A-O1 「ガラスの化学組成分析からみた海と陸のシルクロードにおける古代ガラスの流通に関する一考察」
○村串 まどか，中井 泉（東理大・理）

10:30～10:55 A-O2 「復元実験による奈良時代中空ガラス製品の製作技法研究
—奈良時代における宙吹き技法の伝播をめぐって—」
○林 佳美（東芸大・美）

10:55～11:20 A-O3 「古墳時代のトンボ珠（装飾珠）における諸問題」
○小寺 智津子（東大大学院・学振研究員）

11:20～11:30 休憩（10 分）

(司会：東 容子)

11:30～11:55 A-O4 「可搬型分析装置によるエミール・ガレ作品の化学的分析」
○和泉 亜理沙，阿部 善也，中井 泉（東理大・理），
小林 宏子，池田 まゆみ（北澤美術館）

11:55～12:20 A-O5 「サーパーン・ガラス容器の生産および流通
—大英博物館所蔵メソポタミア都市遺跡出土資料の化学組成分析から—」
○阿部 善也（東理大・理），四角 隆二（岡山市立オリエント美術館）

12:20～12:45 A-O6 「3～7世紀、トランスクーカサス地域における
ガラス工房の操業に関する考察」
○四角 隆二（岡山市立オリエント美術館），阿部 善也（東理大・理）

【口頭発表に関して】

- ・ レクチャーホールにて行います。
- ・ 口頭発表は一人 25 分とし、発表 20 分、質疑応答 5 分とします。
- ・ A-O3 の発表と A-O4 の間に 10 分間の休憩を取ります。
- ・ 原則として自身のパソコンを持参のうえ使用してください。

ポスター発表（A 発表 4 件， B 発表 5 件）

13:45～15:45

A-P1 「非破壊化学分析から見た江戸時代のガラスの特徴とその考察」

○馬場 慎介，新井 沙季，今井 藍子，村串 まどか，中井 泉（東理大・理），
東 容子（MIHO MUSEUM），大藤 文江（瓶泥舎びいどろ・ぎやまん・ガラス美術館）

A-P2 「重層ガラスビーズに関する考古化学的研究」

○今井 藍子，村串 まどか，阿部 善也，中井 泉（東理大・理）

A-P3 「北海道道南地域の遺跡出土ガラスの考古化学的研究」

○新井 沙季，馬場 慎介，中井 泉（東理大・理），中村 和之（函館高専）

A-P4 「非破壊オンラインサイト分析による古代エジプト銅赤ガラスの製法および変遷の解明」

○日高 遥香，阿部 善也，中井 泉（東理大・理），
四角 隆二（岡山市立オリエント美術館）

B-P1 「東洋ガラス印刷付き一般びん「衣玻璃」ご紹介」

○安部 仁深（東洋ガラス）

B-P2 「ヨーロッパにおける江戸切子の広報活動」

○堀口 徹（堀口切子）

B-P3 「妖精の森ガラス美術館で作られたウランガラス」

○畠山 耕造（妖精の森ガラス美術館）

B-P4 「町田市立博物館主催『日本のグラヴィール』展のご紹介」

○齊藤 晴子（町田市立博物館）

B-P5 「石川県能登島ガラス美術館 2016 年度の事業活動について」

○床坊 瞳美（石川県能登島ガラス美術館）

C 発表（液晶ディスプレイによる作品紹介 8 件）

13:45～15:45

C-1 「Core Glass」

松島 巍

C-2 「ガラスの内側」

奥野 美果

C-3 「scene シリーズ」

池本 一三

C-4 「白華技法によるエジプトファイアンスの復元実験」

山花 京子

C-5 「漂う」

山科 昌子

C-6 「小文間の自然から」

藤原 信幸

C-7 「東京藝術大学ガラス造形研究室修了作品コレクション」

東京藝術大学ガラス造形研究室卒業生

C-8 「多摩美術大学工芸学科ガラスプログラムの授業作品」

池本 一三

【ポスター発表（A, B 発表）、C 発表に関して】

- ・工芸棟ガラス講義室にて行います。
- ・ポスター発表のポスターの掲示は 12:45～13:30 の間で行ってください。
- ・発表時間は 13:45～15:45 としますが、コアタイムは指定いたしません。代わりに、13:45 より各自 3 分以内でポスターの内容を順番に紹介・説明する時間を設けます。ご自分のポスターの前に 13:40 までに集合してください。紹介の順番は上記の A 発表→B 発表の番号順とします。
- ・C 発表は液晶ディスプレイでの発表となります。事前に提出いただいたファイルをまとめ、上記の順番で自動再生する形となります。繰り返して再生されます。
- ・ポスターの撤去は 15:45 までに各自で行ってください。

A-01

ガラスの化学組成分析からみた海と陸のシルクロードにおける 古代ガラスの流通に関する一考察 ○村串まどか, 中井 泉 (東理大・理)

【はじめに】 ガラスは古来より人間生活と密接に関わり、技術とともに海と陸のシルクロードを通じて広範な地域へと伝播した。我々は日本を中心とする古代ガラスの流通解明を目的に、シルクロードの通過点であるインド・東南アジア、中央アジアでガラスの分析調査を行ってきた。本発表では、これまでの分析結果を紹介し、研究成果の概要について報告する。

【ガラスの化学組成】 これまで分析した海外の資料約 850 点を化学組成にもとづいて分類したところ、これらのシルクロード地域には、日本の弥生時代から古墳時代に見られるソーダ石灰ガラス ($\text{Na}_2\text{O}-\text{CaO}-\text{SiO}_2$)、アルミナソーダ石灰ガラス($\text{Na}_2\text{O}-\text{Al}_2\text{O}_3-\text{CaO}-\text{SiO}_2$)、カリガラス($\text{K}_2\text{O}-\text{SiO}_2$)という 3 つの組成タイプのガラスが主として流通していることが明らかになった。しかし、不純物として含まれる微量元素に着目すると、日本の古代ガラスとの異同が認められ、同じガラスタイプでも地域によって特徴の異なる多様なガラスが流通していたことが明らかになった。このような日本とシルクロード地域の古代ガラスに見られる共通点・相違点から、今後時代や地域に着目した日本へのガラス流通ルートの解明を進めていきたい。

A-02

復元実験による奈良時代中空ガラス製品の製作技法研究 ——奈良時代における宙吹き技法の伝播をめぐって—— ○林 佳美 (東芸大・美)

日本では七世紀後半に国産原料を用いた高鉛ケイ酸塩ガラス ($\text{PbO}-\text{SiO}_2$) の生産が開始され、八世紀に最盛期を迎えたと考えられているが、当該時期における容器類の生産、とくに宙吹き技法の伝播の有無については研究者によって異なる見解が示されているのが現状である。

この問題を考えるうえで注目されるのが、①正倉院伝来「吹玉」や②奈良新薬師寺十二神将像眼球嵌入品、③岡山大飛島遺跡出土管状製品、④京都神雄寺跡出土管状製品といった奈良時代中葉から後半に位置づけられる中空のガラス製品である。本発表では、奈良時代における宙吹き技法の伝播に関する初歩的研究として、これらの製作技法を実験製作によって検討した成果について報告する。

実験製作では飛鳥時代から奈良時代のガラス生産関連遺構や遺物を踏まえ、七輪を熔解炉に見立て、木炭を熱源とし、鞴の代わりに送風機を使用しながら小型の坩堝で高鉛ケイ酸塩ガラスのカレットを熔融した。この設備でガラスの熔融や加工が可能なことが明らかになったほか、①と④については実際の遺物の示す細部の特徴を再現することができた。今後、実験製作によって間接的に示した奈良時代における宙吹き技法伝播の可能性について、科学的な調査を含めた多角的な検討に取り組みたい。

古墳時代のトンボ珠（装飾珠）における諸問題

小寺智津子（東京大学大学院人文社会系研究科・日本学術振興会特別研究員）

日本の古墳時代の墳墓からは、多数のトンボ珠（装飾珠）が出土している。その中には列島外からの搬入品と、列島内において製作されたと考えられる製品が存在する。搬入品は、当時のユーラシアの東西交渉や、東アジア内の交渉を考察する上で重要な遺物であり、一方で列島内における製品は、古墳時代におけるガラス製造技術の伝播や発展を考察する上で、重要な遺物である。しかし残念ながら、これまで製作技術などに基づいた詳細な研究はほとんど行われていない。

報告者は、現在これらトンボ珠の集成と実見による詳細な検討を行っており、上述した諸問題に迫ろうと考えている。今回は特に興味深い二つのタイプの珠について、研究報告を行う。一点は、網目状の文様をもつ網目文珠である。その製作技法には特徴があり、製作地と搬入ルートについて、ある程度の推測が可能と考えられる。雁木珠などと異なるルートを検討したい。もう一点は、斑点状の文様を持つ斑点文珠である。斑点文珠は、搬入品と列島製両方の可能性が指摘されており、これまででは製作地も含めて曖昧な判断であった。しかし珠の製作上のいくつかの特徴やその完成度の違いなどから、搬入品と列島製双方が存在した可能性が高いことを報告したい。特に列島製はその製作技法が興味深く、製作技法の伝播と発展に関しても、検討を加えたいと考えている。

可搬型分析装置によるエミール・ガレ作品の化学的分析

○和泉 亜理沙、阿部 善也、中井 泉（東理大・理）、
小林 宏子、池田 まゆみ（北澤美術館）

エミール・ガレ（1846–1904）はアール・ヌーヴォー期を代表するフランスのガラス工芸作家である。我々は 2012 年より、長野県諏訪市の北澤美術館に収蔵されたエミール・ガレのガラス作品に対して、可搬型蛍光 X 線分析装置を始めとする複数の非破壊分析装置を用いた多角的な化学分析を継続的に行っており、形成法・装飾技法の化学的な理解と各作品の製作年代と関連付けた考察を進めてきた。本発表では、これまで行った 83 作品の化学分析により我々が明らかにしてきた成果の概要と合わせて、最新の研究成果について報告する。ガレのガラス作品には、母材としてソーダ石灰ガラスとカリ鉛ガラスの 2 種類が利用されており、利用された製法との対応が見られた。また、ガレ作品に特徴的な鮮やかな色ガラスに関しては、本研究によって 6 色 11 種類の着色要因が判明した。またガレ作品の特徴的な装飾技法の一つである「パチネ」（ガラス表面に古色を付ける表面処理技術）については、「海」を題材にした作品 3 点のパチネ部分から共通して銀 (Ag) が検出された。エナメルの着色要因に関しては、色ガラスおよび金属酸化物による着色の他に、顕微鏡を用いた高倍率の観察によって細かな気泡による光の散乱を利用した白色エナメルの利用が明らかとなった。

A-05

サーパーン・ガラス容器の生産および流通 一大英博物館所蔵メソポタミア都市遺跡出土資料の化学組成分析から一 ○阿部 善也（東京理科大学），四角 隆二（岡山市立オリエント美術館）

大英博物館の中近東部門には、19～20世紀の発掘調査によってメソポタミアの都市遺跡から出土したサーパーン・ガラス容器資料が多数収蔵されている。このたび同部門の St. J. Simpson 博士の協力のもと、世界的にも希少なこれらの資料に対し、実測と共に非破壊の化学組成分析を行ったので、その概要を報告する。大英博物館内に可搬型の蛍光 X 線分析装置を持ち込み、Nineveh や Nimrud などのメソポタミア都市遺跡より出土したガラス容器資料 72 点を非破壊で分析した。風化が著しい 7 点を除き、50 点はユーフラテス以東（おそらくメソポタミア）で一次生産されたと考えられる植物灰ガラス、15 点はユーフラテス以西（主に東地中海沿岸）で生産されたと考えられるナトロンガラスに分類された。植物灰ガラス 50 点について、サーパーン・ガラスの化学組成の文献値と比較した結果、既報にあった 3 種類の組成グループの他に、不純物の多い新たな組成グループが検出された。発表では、出土遺跡および器形と化学組成の対応関係の検証のほか、一部の器形に着目して伝イラン北部由来のサーパーン・ガラス資料と化学組成を比較した結果についても報告する予定である。

A-06

3～7世紀、トランスクーカサス地域における ガラス工房の操業に関する考察 ○四角 隆二（岡山市立オリエント美術館），阿部 善也（東理大・理）

近年、考古学や文化財学と分析化学の共同研究が進んだ結果、不明確だったサーパーン・ガラス研究に大きな進展がみられた。すなわち、東地中海系ガラスとサーパーン・ガラスは成分組成で明確に区別できるようになり、先行する「パルティア・ガラス」の大半は東地中海方面からの流入品だったことが明らかとなった。また、発表者らは伝イラン由来資料とメソポタミア出土資料の器種組成と成分組成の比較から、サーパーン・ガラスの製作工房はメソポタミアであること、一部の器種が選択的にイラン北部へ流入したと結論した。その後、天理参考館所蔵円形切子碗のように、成分組成と形態的特徴が一致しない資料の報告があり、トランスクーカサス地方における「サーパーン・ガラス」生産を示唆する意見も提出された。

本発表では、別に発表した紺色斑点文ガラス容器やアーケード状文切子容器の状況とあわせて、「サーパーン・ガラス」にみられる「再利用」の問題を整理した後、該期のトランスクーカサス地域におけるガラス生産の可能性について考察を進める。

非破壊化学分析から見た江戸時代のガラスの特徴とその考察

馬場 慎介, 新井 沙季, 今井 藍子, 村串 まどか, 中井 泉 (東理大・理)

東 容子 (MIHO MUSEUM), 大藤 文江 (瓶泥舎びいどろ・ぎやまん・ガラス美術館)

近世日本では、江戸切子・薩摩切子に代表されるように高い芸術性を持つ、優れたガラス作品が作られ、その技術は今日でも高く評価されている。しかし、この時代のガラスは科学的な分析例が少なく、当時の製法や生産地についての考察はほとんどなされてこなかった。そこで本研究では江戸時代の化学組成に着目し、江戸時代のガラスの流通について考察することを目的とした。化学組成分析には中井研究室が企業と共に開発した、可搬型の非破壊蛍光 X 線分析装置 OURSTEX100FA を用いた。資料は愛媛県松山市の瓶泥舎びいどろ・ぎやまん・ガラス美術館に所蔵されている江戸時代のガラス 97 点を分析対象とした。分析したガラスは主成分組成より酸化鉛を 30~70 wt% 含む、"カリ鉛ガラス"が大半を占めており、中世以降広く流通したタイプのガラスが近世日本でも広く流通していることがわかった。鉛原料の不純物である亜鉛に着目してみると、その含有量により少なくとも 2 種類の鉛原料が存在していた可能性を示した。

重層ガラスビーズに関する考古化学的研究

○今井 藍子, 村串 まどか, 阿部 善也, 中井 泉 (東理大・理)

重層ガラスとは、ガラス内部に金・銀箔を挟み込んだガラス製品で、考古学的には地中海地域が原産地とされ、地中海周辺、中央アジア、日本に至るまで広く分布する。重層ガラスは二次加工の可能性が低く、一次製作地の情報を直接反映するため、古代ガラス流通を議論する上で重要な資料である。本研究では国内外出土重層ガラスの蛍光 X 線分析を行い、基礎ガラス組成による特性化を試みた。**Fig. 1** は日本出土の古代ガラスを ZrO_2 - SrO プロットにより分類したものである。日本出土重層ガラスの組成は **Fig. 1** に示すように地中海周辺地域や中央アジアに起源を持つソーダ石灰ガラスの他、インド・東南アジアに起源を持つアルミナソーダ石灰ガラスが確認され、異なる地域の重層ガラスが流通していることが分かった。

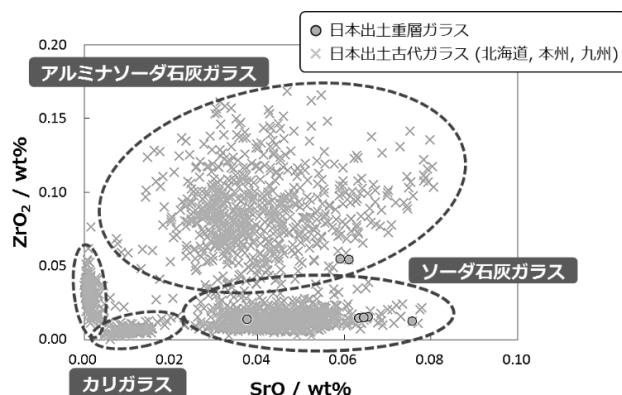


Fig. 1 化学組成による重層ガラスの起源推定

北海道道南地域の遺跡出土ガラスの考古化学的研究

○新井沙季、馬場慎介、中井 泉（東理大・理）、中村和之（函館工業高等専門学校）

古代ガラスの化学組成は、原料の違いを反映することから、出土ガラスの化学組成分析を行うことで産地や年代を推測することが可能である。国内におけるガラスの一次生産は、奈良時代に最盛期を迎えるものの、10世紀後半になり中国からカリ鉛ガラス($K_2O-PbO-SiO_2$)が技術と共に流入し、国内ガラス生産の中心となった。中世日本におけるガラス流通については、化学組成分析の分析点数が少なく、まだ議論もあまりなされていない。そこで本研究では、中世のガラスに関する知見を深めるべく、北海道道南に位置する瀬棚町の南川2遺跡出土ガラスビーズに着目して分析を行い、北海道におけるガラスの流通について考察した。可搬型蛍光X線分析装置 OURSTEX 100FA を用いて化学組成分析を行ったところ、南川2遺跡出土のガラス玉は、今回分析した76点について全てカリ鉛ガラスであることが分かり、化学組成から特性化を行ったところ、PbO含有量に差が認められた。北海道では同時代、カリ石灰ガラス($K_2O-CaO-SiO_2$)が多く出土している遺跡もあり、出土ガラスタイプの割合にも差がみられることがわかった。発表では、中世日本の他の遺跡出土のガラス玉の化学組成と比較することで、北海道のガラス流通についてさらに考察する。

非破壊オンサイト分析による 古代エジプト銅赤ガラスの製法および変遷の解明

○日高 遥香、阿部 善也、中井 泉（東理大・理）、
四角 隆二（岡山市立オリエント美術館）

銅(Cu)による赤色着色が施されたガラスは「銅赤(どうあか)ガラス」と呼ばれ、古代ガラス生産の最初期から利用されていた。本研究では古代エジプトを中心とする銅赤ガラスについて、エジプトの遺跡出土資料および国内の博物館資料を対象に、その製法およびその変遷を解明するために様々な可搬型の分析装置を用いた非破壊・オンサイト(その場)での化学分析を行った。分析した資料全70点を着色要因によって分類したところ、Cuの赤色の酸化物である赤銅鉱(Cu_2O : cuprite)の微粒子による着色と、ナノスケールの金属Cuの粒子による着色の2種類に分類できた。着色要因を時代別に見ると、ガラス生産初期の新王国時代(前15~11世紀)の資料は全てcuprite着色だったのに対し、エジプトにおけるガラス生産再興期のプトレマイオス期以降(前4世紀~)の資料にはcuprite着色と金属Cuナノ粒子着色の双方が存在した。今回分析した資料は全てソーダ石灰ガラスに分類される組成を有していたが、ソーダ融剤の種類(植物灰ないしソーダ鉱物)に関して、時代あるいは着色原因と対応した違いが認められた。この結果は、古代エジプトにおいて銅赤ガラスの製法が時代により変遷した可能性を示すと共に、銅赤の着色工程に融剤の種類が関係していることを示唆している。

東洋ガラス／印刷付き一般びん「衣玻璃」のご紹介
東洋ガラス株式会社 企画開発部：○安部 仁深 八百幸玲

東洋ガラスが 2014 年にリリースした『衣玻璃』シリーズは、
ガラスびんに美しい意匠を纏わせた印刷付き一般びんです。
東洋ガラスオリジナルの印刷デザインが 新時代のガラスびん印刷加工技術により
施されています。

『衣玻璃』が様々な中味メーカー様のお酒やラベルと出会い、
数多くの魅力的な商品が誕生している様をご紹介いたします。 (写真は 2016 年デザイン)

TOYO GLASS DESIGN BOTTLE

衣玻璃
きぬはり



ヨーロッパにおける江戸切子の広報活動
堀口 徹 (堀口切子)

2016 年 9 月、ヘルシンキ（フィンランド）、ストラスブール（フランス）そしてロンドン（イギリス）において、外務省や日本大使館等の協力のもと、日本ブランド発信事業の一環として「江戸切子」に関する講演、作品展示などの紹介イベントが行われた。

現代の江戸切子は明治初年にイギリスから招聘した技師、エマニュエル・ホープトマンが品川硝子で技術指導した西洋式カットガラス技法をもとに発展したものであり、その経緯もふまえて、欧州の人々に対し、いまや日本文化のひとつとして根付いた江戸切子を広く発信する試みであった。

本発表ではこの事業に江戸切子職人として携わった立場から、各地でのイベントの内容や参加者からの様々な反応について報告する。

妖精の森ガラス美術館で作られたウランガラス 畠山耕造（妖精の森ガラス美術館）

妖精の森ガラス美術館は、人形峠で産出されたウランを着色剤とし用いた「妖精の森ガラス」を制作・販売する目的で建設されました。ここでは 2001 年から数多くの国内ガラス作家を招聘し、ウランガラスによる商品開発や可能性調査のための試作を行ってきました。

このポスターは、初期の内田守氏や山田輝雄氏の仕事から最近の岡山県内の若手作家や当館のスタッフによるものまで、16 年の歩みをご紹介するものです。

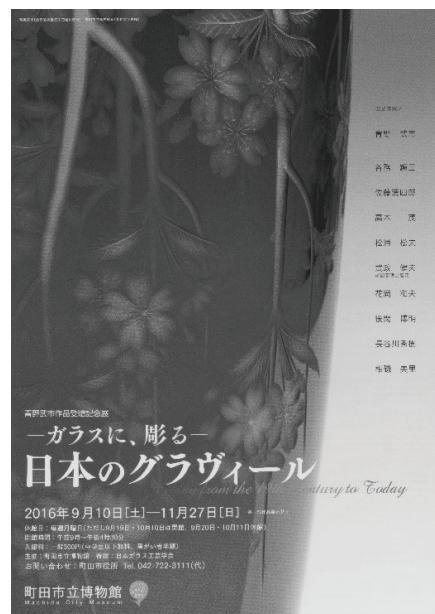
町田市立博物館主催「日本のグラヴィール」展のご紹介 ○齊藤晴子（町田市立博物館）

町田市立博物館で現在開催中の「青野武市作品受贈記念
—ガラスに、彫る— 日本のグラヴィール」展の見どころを
ご紹介します。

「グラヴィール」とは、銅盤などの回転工具でガラス表面を削り、絵画的な文様を表す技法で、「グラヴュール」や「ホイール・エングレービング」とも呼ばれます。本展覧会は近代日本を代表するグラヴィール作家の一人である青野武市（1921—2011）の作品 87 点が町田市に寄贈されたことを記念して開催されました。江戸・明治期のものから現代の作家の作品まで、約 120 点が展示されています。

本展覧会は日本ガラス工芸学会後援で、会員の花岡和夫氏が制作された作品や、サントリー美術館、郡山市立美術館の所蔵作品も出品されています。

皆様のご来館をお待ちしております（展覧会図録も販売中です）。



石川県能登島ガラス美術館 2016 年度の事業活動について 石川県能登島ガラス美術館

当館はガラス専門美術館として、ガラス芸術に対する理解を深め、ガラス素材に対する関心を高めていただけるように、ガラス作品やガラス資料などを様々な視点で紹介する展覧会事業や教育普及事業をおこなっています。

2016 年度は、企画展、巡回展、テーマ展など計 5 つの展覧会を開催するほか、展覧会に関連した様々な教育普及イベントを実施しています。現在開催中の特別展「ヴェネチアン・グラス～美しきガラスへの憧憬～」(2016 年 9 月 10 日～11 月 20 日) では、繊細優美なヴェネチアン・グラスの名品やヨーロッパ諸国で製造された「ファソン・ド・ヴニーズ」のガラス器のほか、ヴェネチアン・グラスが和ガラスに与えた影響にも触れて和ガラス関連作品なども展示し、人々を魅了したヴェネチアン・グラスの美の精華を紹介しています。

また、当館では展覧会関連事業のほかに、毛綱毅曠氏設計の特徴ある建物空間と能登半島に包まれた穏やかな海を臨む立地を活かし、地域住民や各分野の専門家と協働しながら、ここでしか味わえない文化芸術の体験の場を提供しようとする活動「能登島“ガラスの丘”プロジェクト」もおこなっています。

C-1

Core Glass

松島 巍

発表形式 作品画像 制作工程画像

約3500年前にメソポタミアで始まりローマ時代初期に廃れた原初のガラス器制作法のコアガラス技法の再生と制作展開に40年余り取り組んできました。コアガラスをはじめ紀元前に作られた多様な古代ガラスにはどんな物語があるのか。人の手が作りあげた証しとしての存在は時空を超えて様々なメッセージを発信しています。それらは僕の好奇心とつながり飽きることなく制作を続ける原動力となっていました。

作家略歴

1946 生まれ／1975 コアガラスの研究を始める／1981 「現代ガラスの美—オーストラリア、カナダ、アメリカと日本」京都国立近代美術館／1983「ガラス入門」由水常雄著（平凡社）にコアガラス制作過程掲載／1994「世界現代ガラス展」北海道立近代美術館／1999「日本のガラス2000年」サントリー美術館、「古代ガラスの技と美」岡山市立オリエント美術館／2010「松島巌ガラスの世界—甦るコアガラス」高梁市成羽美術館／2013「古代ガラス—色彩の饗宴」MIHO MUSEUM、岡山市立オリエント美術館
※1994～2016 富山ガラス造形研究所非常勤講師

C-2

ガラスの内側

奥野 美果

発表形式 制作工程画像（含む 制作工程動画）

コメント

鋳造ガラス作品とその制作工程を紹介。

作品は、塊状のガラスとその内側に空間造形を施すものが中心。外側と内包した空間の形状を融合させるオブジェが中心。ガラスの光を溜め込む透明性を利用して、塊ガラスの内側も覗くことが可能にする。

制作技法は、最初に原型を wax で形作り、そこから取った石膏型を鋳型として電気炉鋳造。特に独自で編み出した中空 wax 原型による造形方法によって、塊ガラスの中の様々な空間造形を可能にする。

作家略歴

1987 多摩美術大学デザイン学科立体専攻ガラス専修 卒業
1994 Gerrit Rietveld Academie (オランダ) ガラス科 卒業
2005 第2回現代ガラス大賞展富山2005 優秀賞受賞 (富山)
2007 国際ガラス展金沢2007 審査員賞受賞 (石川) 他
2006 13 New Glass Review 27, 34 Corning (ニューヨーク・アメリカ)
1998/2008 「家庭ガラス工房—電気炉を使って」／「キルンワーク」—ほるぷ出版（共著／編著）

C-3

scene シリーズ

池本 一三

発表形式 作品画像

コメント

過去と現在が共存する渾沌とした記憶の世界を vessel 状の立体に描くことで、二次元のパースペクティブを歪ませイメージの連續性を持たせることによって、未来に繋がる世界を浮かび上がらせる試みをしています。

作家略歴

1978 京都市立芸術大学美術学部西洋画科学科卒業

1988 91'94'世界現代ガラス展、2003 OUT SPOKEN GLASS 展（北海道立近代美術館）

2004 HABATAT GALLERIES（ミシガン）審査員賞受賞、2011 ラトビア美術大学（ラトビア）

2012 Japanese Art and Design（Museum of Arts and Design）、2009 アジア現代ガラス展（韓国）

個展 GALERIE L ハンブルグ（1994）、Chappell gallery ニューヨーク（2005 2007）、大阪大丸（2004）

COMPOSITION GALLERY サンフランシスコ（1995）、池袋西武百貨店（1988）

C-4

白華技法によるエジプトファイアンスの復元実験

山花 京子

発表形式 制作工程画像

コメント

古代エジプトのファイアンスの製作方法には白華技法(Efflorescence)、浸灰技法 (Cementation)、塗り付け技法 (Application) の3種類があったと考えられている。今回はこれらの技法の中でも最も古くから存在したとされる白華技法について、復元実験を行った。実験では、まず原材料の最適な調合比率から探し、乾燥、焼成などについても様々な条件で試作を行った。

実験では、1) 原材料の調合、2) 成形（型抜き・鋳込み・合わせ鋳型）、3) 乾燥（白華）、4) 焼成のプロセスを紹介する。

作家略歴

東海大学文学部アジア文明学科准教授。古代エジプト史（エジプト学・美術工芸史）が専門。東京理科大学や東海大学工学部との共同研究でファイアンスの材料を同定する研究を行う一方、その製法の復元も試みている。

C-5

漂う

山科 昌子

発表形式 作品画像

コメント

人間の人生は限られた時間の中のもの。幸せも不幸も重なり合って現れる。漂いながら生きて行く私たち。風に吹かれ、水の中に浮かび、空気や時間の中に漂い続ける。ガラスの素材と光の融合とに魅かれた私の人生も、時間の中に漂い続けてここまで来ました。

作家略歴

- | | | |
|--------------------|--------------------|-------------------|
| ・ 1987～2015（3年毎開催） | 日本のガラス展 | 《日本ガラス工芸協会主催》 |
| ・ 2005～13（毎年開催） | 京都美術工芸作家協会展 | 《京都・芸術文化会館・他》 |
| ・ 1988 | 世界現代ガラス展 | 《北海道立近代美術館》 |
| ・ 1988 | New Glass Review 9 | 《コーニングガラス美術館 USA》 |
| ・ 1989 《招待出品》 | サントリー美術館大賞展 | 《サントリー美術館》 |
| ・ 日本ガラス工芸協会会員 | ・ 日本ガラス工芸学会会員 | ・ 京都美術工芸作家協会会員 |

C-6

小文間の自然から

藤原 信幸

発表形式 作品の画像（含む 制作工程画像）

コメント

10数年来、制作テーマとしている「取手市小文間の自然から」生まれてきた作品群の紹介と制作工程の簡単な流れを、画像を通してご紹介いたします。

作家略歴

- | | |
|---|--|
| 1984 | 東京藝術大学大学院美術研究科鑄金専攻修了／ピルチャックガラススクール（シアトル） |
| 2005・08・12 「'05 '08'12 日本のガラス展」（08 藤田喬平賞、観客賞受賞）（12 藤田喬平賞） | |
| 2009 「第4回 KOGANEZAKI・器のかたち・現代ガラス展」 黄金崎クリスタルパーク（奨励賞） | |
| 2014 「瑠璃の美（台湾ガラスの美学）」台日玻璃芸術展 宮崎県立美術館 | |
| 2010 「国際ガラス展・金沢2010」金沢・香林坊大和ホール／石川県能登島ガラス美術館（奨励賞） | |
| 2015 「BUNSEIARTEXHIBITION 文星芸術大学 宇都宮文星短期大学教員作品展」宇都宮東武百貨店 | |

C-7

東京藝術大学ガラス造形研究室修了作品コレクション

東京藝術大学ガラス造形研究室

発表形式 作品の画像

コメント

東京藝術大学のガラス造形研究室学生の修了制作作品を画像で紹介いたします。

作家略歴

2006年 ガラス造形講座開設

C-8

多摩美術大学工芸学科ガラスプログラムの授業作品

池本 一三

発表形式 作品画像

コメント

多摩美術大学工芸学科ガラスプログラムの授業で制作した1年から4年までの学生の作品を紹介します。

作家略歴

1978 京都市立芸術大学美術学部西洋画科学科卒業

1991 南オーストラリア教育大学（アデレード）の招待作家として、作品制作、講演

1993～2006 富山ガラス造形研究所特別講師

2006 ピツツバーグガラスセンター(U.S.A)でワークショップをする。

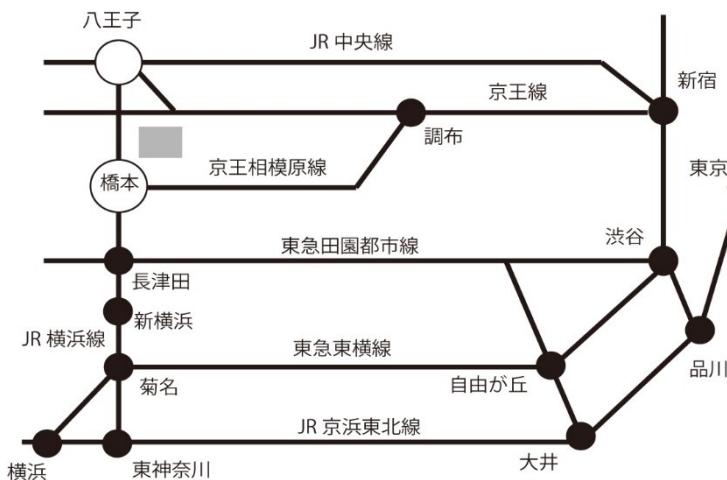
2008 GAS Conference(ポートランド)U.S.Aで講演

現在 多摩美術大学工芸学科ガラスプログラム教授

多摩美術大学八王子キャンパス交通案内

192-0394 東京都八王子市鎌水 2-1723 Tel. 042-679-8611 (代)

問い合わせ先 : 042-679-5657 (ガラス研究室)



【最寄り駅まで】

○新宿駅から : JR 中央線で JR 八王子駅

または京王線で調布乗り換え 京王相模原線 橋本駅

○渋谷駅から : 東急田園都市線で長津田乗り換え JR 横浜線 橋本駅

または東急東横線で菊名乗り換え JR 横浜線 橡木駅

○東京駅から : JR 中央線で JR 八王子駅

または JR 京浜東北線で東神奈川乗り換え JR 横浜線 橋本駅

○横浜駅から : JR 京浜東北線で東神奈川乗り換え JR 横浜線 橋本駅

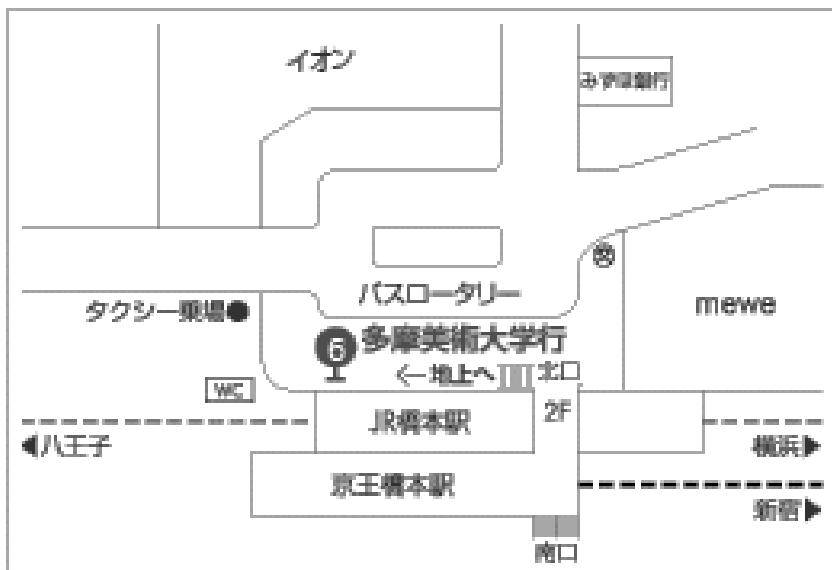
【最寄り駅から】

○橋本駅から : 北口から神奈川中央交通バス「多摩美術大学行」で約 8 分

○JR 八王子駅から : 南口から京王バスで約 20 分

【橋本駅バス乗り場】

橋本駅北口バスロータリー6番乗り場から神奈川中央交通バス
「多摩美術大学行」で約8分。現金運賃=180円／IC運賃=175円

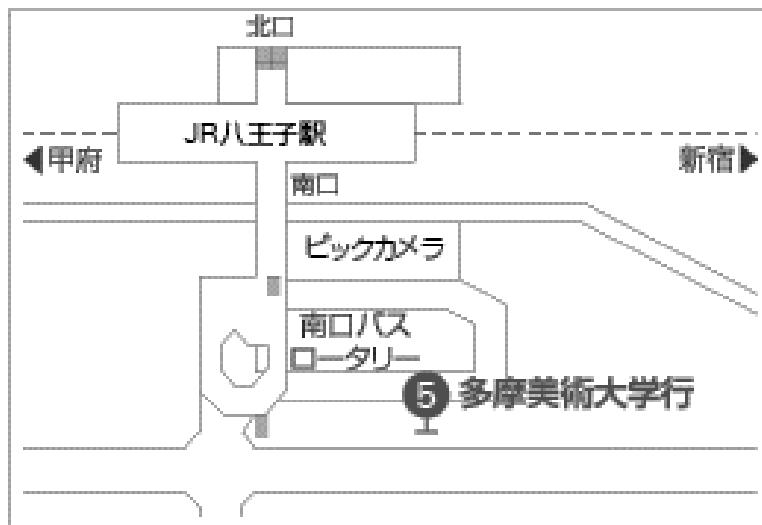


	橋本駅北口→多摩美術大学発行 (橋75系統)	多摩美術大学発→橋本駅北口行 (橋75系統)
時	土曜日	
8	10 20 30 40 44 48 52	19 55
9	00 10 15 30 50	15 30 45
10	03 15 25 50	12 35
11	10 30 50	00 40
12	25 35 45 50	05 20 50
13	20 50	05 20 50
14	20 50	10 40 45 50
15	10 40 58	05 20 40
16	15 45 58	00 15 30 45
17	15 30 45	00 15 30 45
18	03 35 50	05 15 30 45
20		00 20 45
21		00 15

【八王子駅バス乗り場】

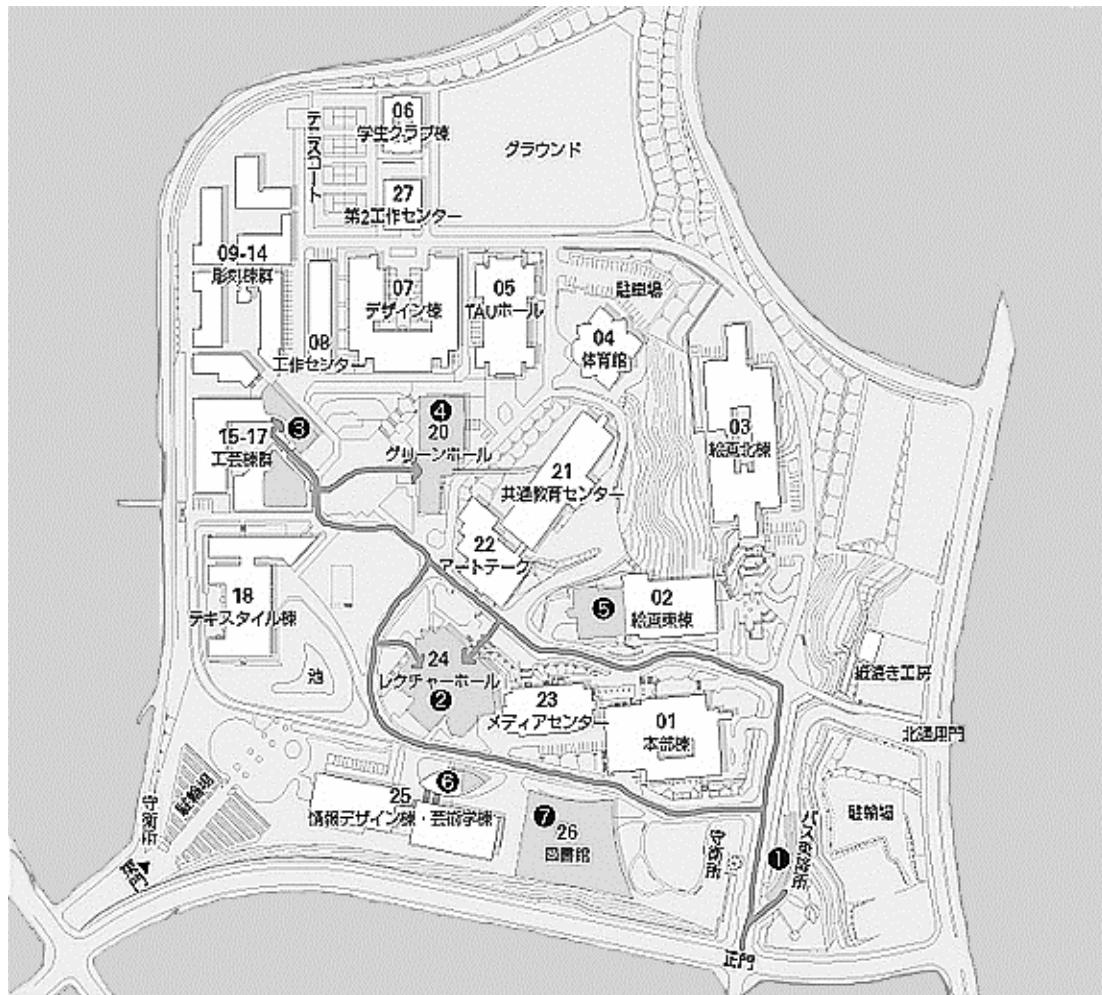
八王子駅南口バスロータリー5番乗り場から京王バス

「急行 多摩美術大学行」で約20分。現金運賃=210円／IC運賃=206円



	八王子駅南口発 →急行 多摩美術大学行き	多摩美術大学発 →急行 八王子駅南口行き
時	土曜日	
8	05 15 25 35 55	30 40
9	15 30 50	00 20 35 50
10	00 15 35 50	10 25 45
11	10 30 50	05 20 45
12	10 25 35	05 20 45
13	00 30	05 35
14	00 30 55	05 30 55
15	20 50	20 35 55
16	00 20 40	15 35 55
17	00 20 40	15 35 55
18	00 20 40	15 35 55
19	00 15 40	15 45
20	10 40	15 45
21		15

多摩美術大学構内案内



① バス乗降所

② A 発表会場（口頭） レクチャーホール 301

受付（9：30～12：50）

③ A 発表（ポスター）.B 発表.C 発表会場，工芸棟ガラス講義室

受付（12：45～15：45）

ガラス工房見学（15：45～16：00）

学生による吹きガラスデモ（16：00～16：30）

閉会.集合写真（16：45～17：00）工芸棟ギャラリー

④ グリーンホール 東学食堂

⑤ イイオ食堂

⑥ コーヒーショップ

⑦ 図書館見学（17：00～17：20）

日本を代表する建築家伊東豊雄氏設計の八王子図書館は、アーチ構造を主体とした、ガラスとコンクリート壁面が一体化した斬新な建築です。キャンパス周辺の自然環境を積極的に取り込んだ開放的な空間をつくりあげています。

◎ 懇親会会場は学内ではなく、橋本駅近くのお店で実施予定です。